

教育センターだより

令和2年度 第3号

黒部市教育センター

中学校の統合初年度を振り返って

黒部市立明峰中学校 校長 中 村 靖

昨年4月に市内の中学校が統合し、清明中学校と明峰中学校が開校した。それから1年が経とうとしている。開校するにあたり、私が最も心配していたことは、統合によって学校への不適応を起こす生徒が出てこないかということだった。生徒にとっては、新たなメンバーに出会うことは不安に感じるだろうし、学校規模が大きくなることや通学方法が変わることに戸惑う生徒が現れることも心配していた。

しかし今のところ、学校での生徒の様子を見たり、先生方からの話を聞いたりする限りでは、そのような問題は感じられない。校内に不登校やいじめの問題がない訳ではないが、学校統合が主な要因ではないように思われる。むしろ、学校全体が温かな雰囲気にもまれており、これが不適応の問題を起こしにくくしてくれているように感じている。このような状況は、本校だけではなく、清明中学校も同様であると聞いている。

生徒たちは、統合前後に何を考えていたのだろうか。間もなく卒業を迎える3年生数人からその思いを聞いてみた。はじめに統合前の気持ちを聞いたところ、「相手校の生徒は怖いのではないかと思っていた」「統合に対するいいイメージはなかった」というような言葉が多かった。では、統合後はどうか。生徒たちは印象に残る言葉を語ってくれた。いくつか、その言葉を紹介したい。

- ・「相手の話は、最後まできちんと聞こうと思った。」
- ・「統合の相手校には、同じスポーツクラブの友人がいたので、そこから友達の輪を広げたいと思った。」
- ・「小学生の時に学校統合があったので（三日市小と前沢小）、そのときのように互いに仲良くなれたらと考えていた。」
- ・「通学方法が変わって、はじめは大変だと思ったが、高校に行ったときのことを考えて気持ちを切り替えた。」

生徒たちの言葉からは、相手の考えや気持ちをきちんとくみ取ろうとしたり、人間関係を豊かにしていこうとしたりする気持ちが感じられる。知らない人間だからといって敵視せず、相手を大事にしようとする姿勢がそこに表れている。また、通学の環境が変わっても、その中で意欲的に活動していこうとするたくましさや柔軟性が感じられる。

生徒は実に豊かなことを考え、実践しているをつくづく思う。自分たちの力で状況の変化に対応しつつ、よりよく生きようと努力している。今の校内の雰囲気も、一人一人の生徒のこのような思いに支えられている部分が多い。私たちは、学校運営や教育活動というと、教職員が生徒たちに何かをしてやっているという感覚になりがちだ。教職員が一生懸命にやっていることは事実だが、生徒の思いや努力が土台にあることも忘れてはならないと思う。

私は昨年度、桜井中学校に着任した。同時に、市内の四つの中学校を一回りさせていただいた。それぞれの学校で多くのことを学ばさせていただくとともに、生徒や先生方、地域の方々に多くお世話になり、感謝している。また、教員生活の終わりの2年間で、中学校の閉校と開校の年という巡り合わせになった。黒部市の中学校教育の節目となる事業に携われたことを光栄に思う。

「出会いに感謝して」

黒部市立石田小学校 校長 宮本 悟

この原稿の依頼を受け、30数年間の教員人生を振り返ってみると、止めどなく思い出が溢れてくる。その思い出のほんの一部を紹介したい。

初任校は朝日町の南保小学校蛭谷分校であった。蛭谷は「びるだに」と読むが、みんな「びるだん」「べるだん」と呼んでいた。山間地にあり、1～4年生までしかなく、全校児童は40名程度だった。5年生になると3kmほど離れた本校（南保小学校）に通う。今では考えられないほど長閑な学校だった。天気がいいので算数の授業を散歩にしたこともある。猿がグラウンドに下りてきたので、社会科を途中から図工（写生）にしたこともある。何も分からない初任の私に対して、周りの先生方もニコニコと見守ってくれた時代だった。雪も多く降った時代で、通勤途中で雪崩に遭ったこともあった。1日で車は完全に埋もれ、駐車場を出るまでの除雪に30分以上かかる冬の毎日だった。

ちなみに私の妻は、蛭谷分校時代の同僚である。教職員7名のうち、未婚者は私と妻の2名のみ。県教委にはめられたと気付いたときにはもう遅かった。周りの人は「籠の中の鳥作戦」と言っていた。

3年勤めて桜井中学校に異動になった。小さな分校から、いきなり規模の大きい中学校への異動だったので戸惑うことも多かった。部活の担当は剣道部。当時の校長は、「中学・高校と柔道をやっていたんだよね。剣道も似たようなものでしょう。ハハハハ。」と無茶苦茶なことを言っていた。いい加減なもんだ。それ以来、どの学校へ行ってもほとんど剣道部だった。でもそれなりに頑張った。多分にコーチの力も借りて、どの学校でも新川地区大会を勝ち抜けるようになり、県選手権大会にも毎回顔を出すようになった。県ベスト4までいったことも何回かあるが、団体での北信越大会出場の夢は叶わなかった。

最初に異動になった時の桜井中学校では同年代の教員が多く、市や地区の大会が終わっては祝勝会・残念会と称して飲んだ。真面目な話も馬鹿な話も楽しかった。もう30年以上たつのに、その頃の仲間とは年1回、泊まりがけで遊んでいる。生涯の友である。

桜井、高志野、鷹施中学校に2回ずつ勤務した。中でも母校である桜井中学校には、計15年間も勤めさせていただいた。本当に有り難いことである。ただ、蛭谷分校も桜井中学校も、その姿をもう見る事ができず、残念である。

改めて退職ということを考えると、今更ながら後悔することはたくさんある。あのときこうしていれば……、どうしてあんな言い方をしたのだろう……などなど。しかし、それ以上に楽しかったこと、うれしかったこと、感動したことがたくさんあったと思う。そしてコロナ禍の今でも「先生、同級会しようよ」「先生定年？落ち着いたらお祝いしようか」と言ってくれる教え子がいる。かけがえのない教え子、かけがえのない先輩や同僚。みんなとの出会いが私の大切な宝物である。これらの出会いが私の教員人生だったと言える。

私と出会ってくれた皆さん、どうもありがとうございました。



三人の先輩

黒部市立中央小学校 校長 戸島 宏之

三十数年の教員生活を振り返るとき、最初に頭に浮かぶのは三人の先輩です。

「もっと真剣に生徒に接してください」

初任校でお世話になったA先生の言葉です。太陽のようなお母さん先生でしたが、厳しく注意を受けたことがあります。「宿題の未提出者に早く提出するよう伝えてください」とリストを渡したところ、A先生がチェックミスを見付けてくださったのです。そのまま生徒に伝えていたら信頼を失うところでした。誠実に生徒に接することの大切さを教えられました。

また、A先生は、「授業を見に来ませんか」と、よく声をかけてくださいました。ある日の道徳では、目にいっぱい涙を溜ながら親子の絆について話をされました。生徒も目を赤くしているのを見たとき、「心がつながっているからこの学級は温かいんだ。こんな学級をつくりたい」と、心に誓ったのを今でも鮮明に覚えています。

「あんな姿勢では、中学生はついてきません」

B先生は、野球部の顧問で兄貴のような方でした。ある日の放課後、私はグラウンドの指揮台に座ったままでサッカー部の指導をしていました。疲れて気がゆるんでいたのです。誰も見ていないところで注意されたときの恥ずかしさを忘れることができません。「B先生みたいに温かく、毅然とした先生になろう」と決意した瞬間でした。

また、教材研究に情熱を傾ける姿からもたくさんのことを学びました。特に、定期考査では様々な資料を準備されたり、過去に作った問題をファイリングしたりして常に研究しておられました。設問が「記号で答えよ」と「記号で書きなさい」では伝わり方が違うことなど、書物では学べないことも教えていただきました。

「じっくり話をすれば、必ず通じるもんだよ」

シンガポール日本人学校で指導していただいたC先生は、神奈川県出身の学年主任でした。ある日、リーゼントの髪型で冷めた表情の生徒が日本から転校してきました。学年会議では「早く正させよう」「周囲に影響がでる」などの声が上がりましたが、C先生は来る日も来る日も彼に話しかけました。髪型を注意することなく、時には放課後にキャッチボールをしながら。そのうち彼の表情は少しずつ柔らかくなり、数日後には髪を普通にして登校するようになりました。そして運動会ではリーダーとして大活躍。教員は彼の力強いリーダーぶりに驚かされました。C先生は転校生が活躍できる場を考えていたのです。厳しさだけで指導をしていた自分がとても小さく思えました。同時に笑顔で運動会を見守るC先生が神様のように見えました。

私は、三人の先輩から「教師のイロハ」を教えてもらいました。どの先輩も、温かくそして穏やかに指導してくださいました。その一つ一つが財産となって、今も私を支えています。

最近、「三人の先輩はどう言われるだろうか」と考えることがあります。

「まだまだだね！」

そんな声が聞こえてきそうです。

最後まで気を引き締めていきたいものです。



教員生活を振り返って

黒部市立桜井小学校 校長 茶 谷 渉

あと1月ほどで、生地小学校を振り出しに始まった37年の教員生活が終わろうとしています。退職を迎えるにあたり、これまでにたくさんの感動と笑顔をくれた子供たちや指導いただいた諸先輩方、ともに仕事に取り組んだ同僚の皆様、保護者・地域の皆様をはじめ多くの方のおかげで今の自分がいることに感謝の気持ちでいっぱいです。

令和元年度、市内の小学校5・6年生が一堂に会する場で話をする機会をいただきました。小学校連合体育大会では「ノーサイド」、小学校音楽会では「ワンチーム」をキーワードに自分の子供たちへの思いや願いをお話ししました。

○連合体育大会では、競い合うときは真剣に競う。しかしその他の場面では互いに感謝し称え合うような素敵な交流をしてほしいこと。

○小学校音楽会では、みんなが一丸となって目当てに向かい、これまで仲間と積んだ練習の成果を発揮してほしいこと。

今年度も同様の立場となり、市内の5・6年生にどんなメッセージを送ろうか考えました。残念なことに新型コロナウイルス感染症の影響で、どちらの行事も中止となりましたが、話をする機会があれば、「前へ」をキーワードに私の願い等を伝えたいと思っていました。



明大ラグビー部の礎を築いた北島忠治元監督は、「長い人生だから数多くの障害物にぶつかるだろう。かわすことによって乗り越えられる障害物ならいい。しかし、本当に大きくて深刻な問題と直面したときは、体当たりで乗り越えていくしかない。それには常日ごろから、何事にも体当たりで進むように心がけていなければならないと思う。困難や難題に直面してもひるまず“前へ”と進むそんな力を身に付けてほしい。」との願いをもっていらっしやいました。

私は、20数年前からずっと卒業生へのメッセージや寄せ書きに「前へ」を使わせていただいています。卒業生との思い出や卒業生への願い等はその都度違いますが、いろいろ考えていく中で行きつくところこの言葉になってしまいます。私自身の弱いところを肝に銘じている部分もあります。特に今年度は、新型コロナウイルス感染症のため、様々な活動が制限され、社会全体がネガティブな行動や考え方になっていないかと心配です。新型コロナウイルスに関してはなかなか見通しが立たず、不安やストレスの軽減はままならない状況ですが、こんなときだからこそ子供たちには、目の前に明るく広がるであろう未来へ向けて、夢と希望をもって前向きに進んでほしいと願っています。

学校に目を向けると、小中学校学習指導要領の全面実施、GIGAスクール構想、新型コロナウイルス対策、働き方改革等に対しても、職員全員の知恵や経験等を出し合い、工夫を凝らして「目の前の子供のために何ができるか」を最優先として計画・実践しているところではありますが、今後もこれまで以上に前向きに進んでいかなければなりません。

終わりになりましたが、退職に際して、何かのご縁があり共に過ごさせていた皆様改めて深く感謝申し上げますとともに、黒部市児童生徒・教職員の健康・安全、ご活躍と黒部市小中学校及び黒部市教育委員会はじめ関係機関の更なる発展を祈念いたします。

退職を迎え

黒部市立若栗小学校 校長 清水 俊 充

退職が迫り、改めて在職中の多くの子供たち、先生方、保護者や地域の方々との素晴らしい出会いに感謝の気持ちでいっぱいです。

さて、長い教員生活を振り返ってみると私の中に、ずっとモデルにしていたお二人の先生の存在があったように思います。そのお二人は、小学校時代と中学校時代の担任の先生です。もちろん、高校や大学でも思い出多い、尊敬できる先生との多くの出会いがありました。何と言ってもこのお二人は私にとっては特別な先生なのです。私の小・中学校時代のことですから、もう50年ほど前のことになりますが、授業の進め方やいろいろな場面で話されたことなどは今でも鮮明に心に残り、不思議なくらい覚えているのです。朱書きで励ましの言葉が添えられているノート、きれいな整った字で色分けされたり、図式されたりした分かりやすい板書、工夫された宿題や課題等々。自分が教師になってみて、先生は、子供同士に自然と競争意識をもたせたり、やる気を出させたりして、いわゆる意欲付けを行うとともに、認め励ます指導をされていたのだとつくづく感じたものでした。もちろん、厳しく叱られたり、説教されたりしたこともたくさんありました。これもまた、どのように話されたか、どんな言葉がけをされたのかということも鮮明に覚えているのです。ともかく、厳しい中にも、いつも親身に子供に寄り添った温かい教えが根底にあったのだと思います。また、当時の社会情勢の話、未来を予測した話等、授業から脱線した話がいつも興味深く面白く、授業よりもそんな話を心待ちにしていたものです。特に、小学校の担任の先生は、ご自身が戦争を経験されており、戦地へ向かったときの思いや気持ちも話してくださいました。決してきれいごとばかりでなく、正直に本音で自分の思いを語ってくださったのでしょ。だからこそ、何十年経った今でも、鮮明に心に残っているのだと思います。



このような素晴らしい先生との出会いがあったにもかかわらず、自分はさほど崇高な理想を掲げて教師になったわけでもなく、日々失敗や反省を繰り返して、決して模範となるような教師ではなかったように思います。しかし振り返ると、私はこのお二人の先生を無意識に、そして常に私の中での教師のモデルとして自分なりに実践してきたように思います。今、改めて教師の関わりは、子供たちにとってかけがえのないものだと感じています。

時代は移り変わり、グローバル化や急速な情報化に伴い、新しい時代にふさわしい教育の在り方が求められています。ICT教育の充実、小学校の全学年35人学級や教科担任制の導入等々、喫緊の課題が山積しています。加え、教員の多忙化等からの人気の低迷、教員の志願者減少による人材不足や質の低下が懸念されている状況も深刻です。しかしながら、教職はいつの時代でも、日本の未来を担う人材を育てる大切な職業です。先生方におかれては、教育者としての使命や誇りを胸に刻み、大切な子供たちのために今後ともますますご健闘されることを心より期待しています。

特別な支援を必要とする子供に今、学校ができること —『居場所』の視点からの考察—

黒部市立若栗小学校 教諭 長崎 みゆき

私は特別支援教育コーディネーターとして、「勉強が分からない」「友達とうまく関われない」「学校に行きたくない」等、困難を抱えた子供たちに何ができるか、いつも考えていました。困難さの背景に発達障害がある場合も多く、特に不登校の子供については、学校で会える機会も少なく、効果的な支援が見当たりませんでした。

今回、富山大学人間発達科学部において、准教授 和田充紀先生のご指導のもと、研修する機会を与えていただきました。大学では講義の聴講や文献研究、学生とのゼミを通して特別支援教育について学び直し、様々な意見を聞いて、複数の視点から方策を考えることができました。その学びの中で『居場所』という言葉が浮かび上がってきました。特別な支援を必要とする子供、特に不登校児童について、学校が居心地がよいと感じる『居場所』となるにはどうしたらよいか、家庭・学校以外の『居場所』にはどのようなところがあるかを調べました。

❀『居場所』とは

『居場所』について、文部科学省は「今後の不登校への対応の在り方について(報告)」(平成15年)で、「自己が大事にされている、認められているなどの存在感が実感でき、かつ精神的な充実感の得られる」場所としている。今では、「絆づくり」の語とともに「居場所づくり」として用いられる。学級や学校をどの児童にも落ち着ける場所にしていくことが「居場所づくり」と言える。「居場所づくり」が魅力ある学校づくりとつながり、不登校の未然防止となる。

❀学級が子供たちの『居場所』となるには

「居心地のよい学級とは」をテーマに学生とゼミで意見交換を行った。思いつくものを列記し、内容を分析してカテゴリー分けをした。そうしたところ、

清潔 友好 安心 主体 ルール 団結 尊重 役割 認め合い
相互理解 受容 許容



発達障害のある子供は、集団の中の規律や暗黙のルールが分からず、辛さを抱えることが少なくない。児童自身が「これはできないので参加しません」と伝えることができる学級、発言が許される学級、「みんな得意なこと、苦手なことがあるよね」と多様性を受け入れられる学級がこれからより求められるのではないかと考える。『居場所』について、教員が子供たちと一緒に考えてみるのもよいのではないかと考える。

❀不登校児童の家庭・学校以外の『居場所』について

「義務教育段階における普通教育に相当する教育機会の確保等に関する法律」(平成28年公布)の施行状況の検討に際し、「不登校児童生徒への支援の在り方について(通知)」(令和元年)では、個々の状況に応じて、教育支援センター、不登校特例校、フリースクール等の民間施設での教育の機会を確保することが明記され、家庭・学校以外の『居場所』も注目されている。実際に富山市において、放課後等デイサービスを利用した日を出席扱いとしているケースもある。

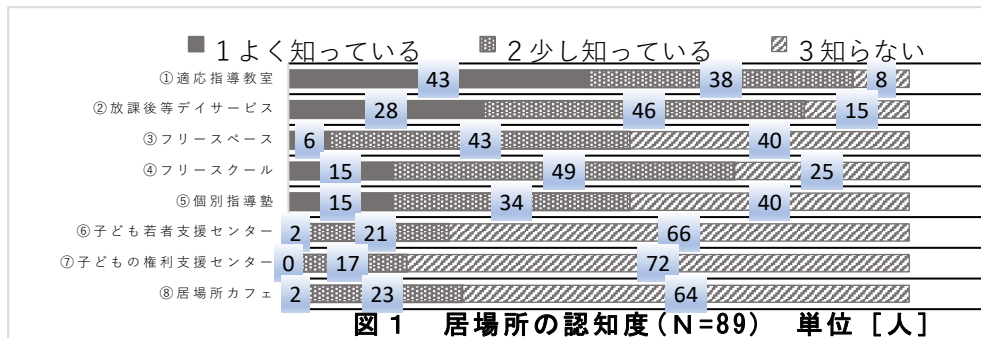
❀教員のニーズについて

富山県内の小学校5校に協力していただき、小学校教員が不登校児童の家庭・学校以外の『居場所』について情報をどのくらい知っているのか、現状を探り、教員が求める情報を把握することを目的としたアンケートを行った。質問内容は「質問1.年齢」「質問2.性別」「質問3.役職」の基本情報、「質問4.不

登校児童の家庭・学校以外の『居場所』について、施設や事業所を知っているか」「質問 5.不登校児童の家庭・学校以外の『居場所』についての情報を知りたいと思うか」「質問 6.(はいと答えた人のみ)知りたい内容」で構成した。「質問 4.」については、①適応指導教室 ②放課後等デイサービス ③フリースペース ④フリースクール ⑤個別指導塾 ⑥子ども若者支援センター ⑦子どもの権利支援センター ⑧居場所カフェ の8項目を挙げ、それぞれの『居場所』について、「よく知っている」「少し知っている」「知らない」の3段階で回答を求めた。「質問 6.」については、自由記述にて回答を求めた。

表1 年齢 (n=89)

年齢	人数(人)	割合(%)
20代	19	21.3
30代	15	16.9
40代	20	22.5
50代	30	33.7
60代	5	5.6



自由記述では、施設・事業所の場所や利用料、対象条件等の基本的な情報を知りたいという意見に合わせて、『居場所』へのつながり方、保護者への情報提供の在り方について知りたいと思っている教員が多かった。

黒部市にある施設・事業



黒部市の二つの施設・事業所を見学した。放課後等デイサービス「高志野ベース」、『居場所』を提供している「結生の家」である。「どのようにしたら『居場所』につながれるか」と質問すると、施設・事業所の方々は「気軽に

連絡をしてほしい」と言われた。また、各地域に指定相談支援事業所があることを知った。

研修、見学から富山県内には、不登校児童生徒を受け入れている施設・事業所が様々あることが分かった。居住地によっては選択肢が少ない場合もあるが、どの地域にも不登校児童生徒をサポートしている施設・事業所がある。お話を伺ったところ、どの施設・事業所も子供たちに扉を開いていると感じた。

まとめにかえて

「不登校になった子供にどう働きかければよいかは考えたことがあったけれど、『未然防止』は考えたことがなかった」と、学生から感想をもらった。教員間でも共通理解し、具体的に何をしていくか、考えていきたい。

今回の研修では、教育だけではなく、福祉も学ぶことができた。子供を取り巻く大人が協力することで、新たな可能性が広がると感じた。学校以外の『居場所』について、教員は正しい情報を把握しておきたい。情報を提供する際は、慎重な対応が求められるため、チームで対応をする。その際、スクールソーシャルワーカー等の力を借りることも有効だと思われる。また、多様な子供や保護者の思いを受け入れ、共通した支援や福祉サービスの提供、連携が行えるような、一本化された窓口が望まれる。



今後は、研修で学んだことを自分の中で消化し、生かすとともに、今一度「学校で学ぶことのよさ」を見つめ直し、子供たちに示していきたいと思いました。このような貴重な研修の機会を与您いただき、ありがとうございました。

〈令和2年度学力向上市町村教育委員会プラン研究委託事業「拠点校の取組」〉

互いに関わりながら、考えを広げ深めていく授業づくり～算数科の授業改善～

黒部市立生地小学校

1 授業力の向上を目指した研修

(1) 模擬授業を中心とした校内研修

研究授業を行う授業者だけでなく、どの教員も「授業に生かすためにどうしたらよいか」という課題意識をもって校内研修を行うために、指導案検討の段階から模擬授業を取り入れた。教員一人一人が、算数科に対して苦手意識のある児童を想起し、児童のつまづきを予想することで、教材、学習課題、学習形態、展開等をより具体的に吟味することができた。

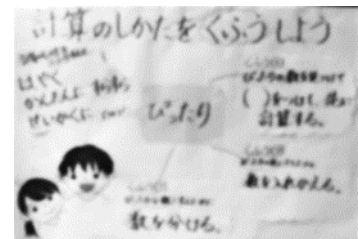
(2) 学力向上研修会

上越教育大学大学院学校教育研究科教授の松沢要一先生から指導をいただいた。5月には、対話が生まれる教材等について研修を行った。その後、9月には第2学年の校内研修、11月に第6学年の公開研修会を行い、松沢先生から授業改善に向けた指導助言をいただいた。

2 関わり合いながら、考えを広げ深めるための授業づくり

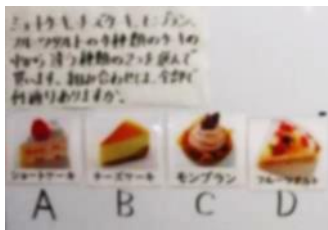
(1) 児童に見通しをもたせた学習展開

第2学年「計算のしかたをくふうしよう」では、導入で「くふう」としてどんなよいことがあるかを問いかけた。また、見付けた「くふう」がどんどん増えていく掲示物を作成した。導入時に「くふう」のよさを明らかにし、掲示物を活用することで、見通しをもって学習を進めることができた。



〈「くふう」が増えていく掲示物〉

(2) 児童が取り組みやすい、生活に密着した教材



〈生活に密着した教材〉

問題場面を学級全体で学び合い、考えを深めていくためには、どの児童も学びに向かおうとする心を持ち、主体的に問題解決に取り組むことができるようにすることが大切である。そこで、単元を通して算数科が苦手な児童も意欲をもって課題に取り組むことができるように、問題場面を工夫した。第6学年「順序よく整理して調べよう」では、買い物の場面を想定し、組み合わせ・順列について学習を進め、生活の中にある算数に親しみながら課題に取り組んだ。

(3) 一人一人の学びを深めるための学習展開

一人一人が学習内容を理解し、学びを深めていくためには、しっかりと自分の考えをもつことが必要である。そこで、課題提示、自力解決、グループでの話合いで1時間、全体での話合い、適用問題で1時間とした2時間に分けた学習展開を行った。自力解決の時間を十分に保障したことで、一人一人がじっくりと課題に向き合い、自分なりの考えをもった上で話合いに参加することができた。

(4) 教師の問い返しの工夫

考えを広めた後、深めるためには、教師の問い返しが重要である。前述の第2学年では「数字の順番を入れ替えて計算してもよいか」、第6学年では「 $3+2+1$ のまとまりって他の方法にもある?」と問い返した。教師が授業のねらいに迫る場面で問い返しを工夫することで、児童の対話を進めることができた。

〈第6学年の話合いより〉

A 児：A から伸びている線が3本、B から伸びている線が2本、C から伸びている線が1本で、 $3+2+1=6$ だから、6通りになる。

T : $3+2+1$ のまとまりって他の方法にもある?

B 児：書き出す方法も樹形図もAが3つ、Bが2つ、Cが1つのまとまりになっている。

C 児：表も横に見ると、Aが3つ、Bが2つ、Cが1つのまとまりになっている。

(5) 次時の学びにつながる振り返りカード

終末には、短時間で学習状況を見取ることができる3段階での振り返りカードを使用した。児童は単元を通して自分の学びを振り返ることができた。また教師は、児童の理解・進歩の状況を見取り、意図的指名にも生かすことができた。

〈令和2年度学力向上市町村教育委員会プラン研究委託事業「拠点校の取組」〉
基礎的・基本的な知識及び技能の確実な習得を目指した学習習慣の育成を目指して
黒部市立清明中学校

本校では、今年度、学力向上拠点校として、次のような取組を行っている。

1 学習規律の統一と指導

統合を控えた昨年度、これまで両校で取り組んできた学習規律を持ち寄り、清明中学校の学習規律を作成した。そして、昨年度の3学期から両校でこの学習規律を基本として指導を行ってきた。また、入学説明会でも、この学習規律を提示し説明した。

今年度を迎え、新型コロナウイルス感染症予防対策として、挨拶や返事については省略するなど修正を加え、取り組んできた。

2学期後半からは、元に戻し、全校で取り組んでいる。

2 家庭での学習習慣の定着

家庭での学習習慣を身に付けるため、今年度のアクションプランを「家庭学習を3年生は90分以上、2年生は80分以上、1年生は70分以上行っている生徒の割合が70%以上になることを目指す」と設定した。

その方策として、学習委員会が中心となって学習時間調査や呼びかけを行うこと、宿題や課題は、適切な内容や量を考えて提示し、提出日が同じ日に集中しないように配慮することにした。週末課題については、市内の2中学校で、生活ノートに週末課題の一覧表を添付する欄を設けており、水曜日には一覧表を配布して、生徒が計画的に学習できるようにした。

3 学習規律

生徒の行動		
授業前	1 授業の前に教科書・ノート・その他必要な物を準備しよう。	
	2 サブバッグ等は指定された場所に置き、学習環境の整備に努めよう。 (教室後ろや廊下の個人ロッカー内は、常に整理整頓しておこう。)	
	3 授業開始までに教室に入り、開始のチャイム前に着席し静かに待とう。	
授業中	4 学級長の号令で授業の挨拶をはっきりとした声でしよう。	
	号令の動き	
	学級長	全 体
	① 「起立」	② 右側に出て並ぶ。※椅子は入れない。
	③ 「気を付け」「礼」	④ 全員そろってお辞儀をして、「お願いします」と言う。 ⑤ 教師の「お願いします」のあと、着席する。 ※終わりの挨拶は、「ありがとうございました」と言う。
	5 教師の話や友達の発表をしっかりと聞こう。	
	6 正しい姿勢で学習しよう。	
	7 机の上は整理整頓し、授業に必要な物以外は置かないようにしよう。	
	8 授業中に私語はやめよう。授業に集中して、無断で席を立たないようにしよう。	
	9 指名されたら、「はい」とはっきりとした声で返事をして、起立してから発言しよう。	
	10 はっきりとした、丁寧な言葉遣いで話そう。	
	11 ノートは「学習内容」「学習課題」「★」「★ポイント」「まとめ」等の学習プレートを意識して、丁寧に書こう。	
12 授業の終わりの挨拶を大きな声でしっかりしよう。		
授業後	13 次の授業の準備をしてから休み時間に入ろう。	
家庭で	14 宿題や週末課題をきちんと行い、期限を守って提出しよう。	
	15 学習に必要な物を確かめ、忘れ物をなくそう。	



〈学力向上研修会 高橋先生の講演〉

3 学力向上に向けた研修会の実施

学力向上研修会を11月19日(木)に実施し、上越教育大学大学院学校教育研究科教授高橋知己先生を招聘し、授業を参観していただくとともに、「学力向上を目指して学校全体で取り組む授業改善」と題して、授業で気付かれた点などを織り交ぜながら、今後、本校で取り組むべき方策について示唆いただいた。

現在コロナ禍にあり、互いのよさを認め合える活動であるグループ学習や行事等を実施することは難しいが、生徒の実態把握をよりこまめに行い、高橋先生から得た助言を参考に、「他者に心を寄せられる人間」の育成に取り組み、学力の向上につなげていきたい。

○令和3年度の黒部市教育センター研修事業について

以下のように計画しています。ご参加ならびに運営について、ご協力をお願いします。

令和3年度 黒部市教育センター研修事業実施計画（案）

令和3年3月現在

番号	部門	研修会名	継新	開催期日	日数	主な内容	受講対象者	受講予定者数	
1	学力向上・ 授業力向上	市教委・市教セによる学校訪問	継	5月～11月	半日	○授業観察・指導助言、若手教員との面談等	各学校を訪問	若手教員数	
2		学級経営研修会 (初任者)	継	5月13日(木)	半日	○講話 ○情報交換	新規採用教員	新規採用教員数	
			継	7月8日(木)	半日	○学級づくりに関する研修			
3		郷土を学ぶ研修会	新	7月下旬	半日	○歴史・文化・産業等の見学をもとにした研修	2・3年次教員、 希望教員	25	
4		学力向上研修会	継	8月10日(火)	半日 (午前)	○特別活動の師範授業 【講師】教育実践研究家 菊池 省三 先生	希望教員	50	
5		★学級づくりに関する講演会	新	8月10日(火)	半日 (午後)	○学級づくりに関する研修 【講師】教育実践研究家 菊池 省三 先生	魚津地区教員	90	
6		情報教育研修会	新	5月下旬	半日	○1人1台端末の活用に関する実技研修①	情報教育研究委員等	22	
			新	6月下旬	半日	○1人1台端末の活用に関する実技研修②	情報教育研究委員等	22	
			新	通年	半日	○1人1台端末の活用に関する実技研修③	各校へアウトリーチ		
7		★理科教育実践講座（自然観察）	継	9月～10月	半日	○自然観察に関する研修	魚津地区教員	15	
8		道徳教育	★道徳教育に関する講演会	継	8月2日(月)	半日 (午後)	○道徳教育に関する研修 【講師】上越教育大学大学院 教授 早川 裕隆 先生	魚津地区教員	90
9		特別支援教育	特別支援教育研修会	継	8月中旬	半日	○特別支援教育に関する研修	希望教員	25
10			★生徒指導に関する講演会	継	8月25日(水)	半日 (午後)	○生徒指導に関する研修 【講師】生徒指導コンサルタント 吉田 順 先生	魚津地区教員	90
11		生徒指導	生徒指導主事等研修会	継	5月19日(水)	半日	○生徒指導主事としての実務と演習、情報交換	生徒指導主事 カウンセリング指導員 カウンセリング協力員等	13
					6月18日(金)	半日	○夏季休業中の生徒指導、情報交換 ○児童生徒理解について		13
					11月12日(金)	半日	○冬季休業中の生徒指導、情報交換 ○学校不応問題への対応に関する事例研究		13
	2月15日(火)				半日	○学年末休業中の生徒指導、情報交換 ○学校不応問題への対応と未然防止 (兼 いじめ問題等に関する研修会)	13		
12	いじめ問題等に関する研修会	継	4月中旬	半日	○黒部市いじめ防止基本方針の確認 【講師】黒部市教育委員会 学校教育班長	教頭	11		
			2月15日(火)	半日	○学年末休業中の生徒指導、情報交換 ○学校不応問題への対応と未然防止 (兼 生徒指導主事等研修会)		11		
13		外国語教育研修会	継	8月5日(木)	半日 (午後)	○小・中学校外国語科の指導の連携について 【講師】富山大学大学院教職実践開発研究科 教授 岡崎 浩幸 先生	小学校5・6年外国語科 担当教員 中学校英語科教員、 希望教員 (※魚津地区教員相互 参加型)	20	
14	黒部 国際化 教育	帰国児童生徒教育研修会	継	5月下旬	半日	○代表者会、全体研修会	校長 帰国児童生徒教育担 当教員等	25	
15		国際理解教育研修会	継	10月下旬	半日	○国際理解教育について	校長 帰国児童生徒教育担 当教員等	25	
16		黒部国際化教育 外国語教育研究部会研修会	継	7月	半日	○夏季休業中の研修に向けて	外国語教育研究部員	13	
	1月			半日	○年間指導計画等の見直し	13			

★魚津地区教育センター協議会の協業事業